
猛吹雪の蠱毒

暮菱葛葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猛吹雪の蠱毒

【Zコード】

Z3941-T

【作者名】

暮菱葛葉

【あらすじ】

冬。

学校行事のスキー合宿に行つた暮菱葛葉は、事件に遭遇する。クラスの委員長とともに、事件の解決に乗り出すのだが……。

シリーズ第3作目。

前作読んでなくても大丈夫です。

活動誌『然』8号より。

(前書き)

Bタグなんて実はほとんどながつたり。
シリーズ全体につけてるタグです。

たとえば、「目的のためなら何だってできる」という言葉がある。しかし実際のところ、その「目的の達成」というものの自体は人生のごくごく一部に過ぎないものでしかなく、それ一つのためにそれ以外のすべてを捨てるのは愚か者のることで、要するに目的を達成するためには手段を慎重に、細心の注意を払って選ぶべきである。だけど、そんな理論はうちのクラスの大半には適用されないらしい、目的のためなら何だってするどころか手段を選びさえしない危なっかしい輩が大勢いるのである。

隣の座席でぐつたりしている笹代涼風にそんな嘆きを聞かせると、蹴られた。曰く、そんなのクラス委員が心配することで、葛葉、お前が心配するようなことじやねーよ。

状況を説明すると、学年でのスキー合宿に向かうバスの中で、涼風が酔つてしまつてすることがなくなつたので、いつものようにくだらない話をしていた、という感じである。もつとも、話していたのは僕だけで、涼風には雑談に興じるような体力はないのだけど。

それにしても、スキー合宿か。

運動能力が皆無の僕にとっては、地獄だ。

地獄兄弟だ。

まったく、雪国の住民が全員スキーが出来るとか、そんなことを思わないでほしい。
さーぼろつ。

サボつた。

みんながスキーではしゃいでいる中、小屋の陰でケータイをいじっている。さすがに煙草は吸えないけど、スキーをしなくていいな

から充分だ。念には念を入れて、足跡まで消した。これは絶対に委員長にだつてバレるまい。完全犯罪成立だ。スキーをするより重労働だつたといつても過言ではない。いや、さすがに過言だけど、とにかくここには誰も来ないだろう。

「あ、暮菱葛葉」
くれびし

ノレ
た

見ると、そこにはクラスの副委員長、仙堂零君せんどうりょうくんだつた。う
ちのクラスは委員長がパーソナリティであるのがしばしば学級問題と
なるのだけど、そんなクラスでも唯一と言つてもいい、副委員長た
り得る存在である。

外見的にはこれといった特徴はないが、歯に衣着せぬ発言から、みんなにはあまり好かれていない。

——「んなど」「ふで何や」「てんの、セロ副委員長」

サホリがいねーが見回してんがよ】

「さおりね、ここでは見なかたよ」とか他のどじんはしるんじやないかな?」

「そうか、いなかつたか。ご協力感謝するぜ、暮菱葛葉」「いやいや、このくらい一般市民として当然の責務だよ」そのまま僕に背を向けてつかつかと去っていく。

あれ?
帰ってきた。

「あのなあ

雪を気にせず、僕の隣にじつかりと座る零君。
「うー、涼風、以二タイプつづづー。」

「クラス人気投票堂々一位の暮菱葛葉が、こんな所でサボつてい

いのか？」

「クラス人気投票？」

そんなのをいつやつたのだろう。つていうか僕が一位？

零君はにやりと笑つて付け足した。

「七割以上の票を得て、な」

多いな。

「安心しろ。俺は残りの三割の方だ」

それつて嫌われてるつてことじやん。

嫌われ者に嫌われる僕。

委員長のキヤラのせい今まで立つてなかつたけど、仙堂零、

なかなか普通人じゃなさそうだ。

「野党たれ、つつーのが俺の信条でな。

アウトロ
それでだ、暮菱葛葉。この際だからお前に聞きたいことがある

「僕は言いたいことはないよ」

「まあまあ、そう言わずに」

さすがに一度目は通じないか。

言つて、零君はおもむろに何かを取り出す。

取り出したのは、何枚かの写真だった。

どの写真にも、僕と涼風の姿が映されている。

「俺が秘密裏に収集した、お前らの不純異性交遊、否、不純同性交友の証拠さ！」

そのキャラは鬱陶しいが。どうやつてそんな写真を集めたのかは疑問だけど、別にそんなに問題になる姿は映つていない。そんな行動、とつてないんだから当たり前か。

「ふふふ……。じゃあ聞くが、学園祭前、準備をサボつて三階の空き教室で、お前ら一体何をしていた？」

「……あ

迂闊だった。あれはそういうのじゃないけど、人によつては誤解を招きかねない。

「何をしてたか聞いてんだよ。つん？　お前らは言えないようなことをしてたのか？」

「いや、その、あ、あわわ……」

「「」のことを大好きな委員長にバラされたくなかったら、俺の質問に答えることだ」

「ちょっと待つて」

一瞬で冷静になった。

大好きな委員長？ 僕が委員長のことを？ いつ、誰がそんなことを？

そんなこと、地の文でも語ったことがないのに…

「地の文？ おかしなことを言つたな。

そんなの、いつも反応見たらわかることだろ。

とりあえず、図星のようだな。わあ、質問に答えて貰おうか

「……わかつたよ、仕方ないな」

「質問一。生年月日は？」

「一九九四年六月一日」

「質問一。好きな食べ物は？」

「ケーキ」

「質問二。じゃあ、嫌いな食べ物は？」

簡単な質問ばかりが続く。他愛のないものばかりで、目的が見えない。

「」のいつのつて、だんだん核心に迫つてくるんだろうな。

「質問四。笠代涼風との関係は？」

お、質問の種類が変わった。

「友達。親友って言つてもいい

「そうかそうか。

質問五。委員長との関係は？」

「クラスメイト。隣の席。いつもだけど、学園祭のときは特にお世話になつたかな」

「質問六。その委員長に副委員長になつたりして恩返しがしたいとかは？」

「それはない」

仕事押し付けよつとすんなよ。

「質問七。狐の人との関係は？」

「狐の人？　ああ、雪比等さんか。あの見た目だし、狐の人といつ
一ツクネームはぴったり嵌まってる気がする。」

「雪比等さんね。家に居候させてもらつてる」

「ふむふむ、居候ね。これは知らなかつた。」

「質問八。その三人から一人を選ぶとすると？」

「選ぶ？　どうこうこと？」

「じゃあいい。質問を変えよう。」

「愛する人に殺されてもいいとか思つたことは？」

「そんなことはないけど」

「む。質問九。同性愛についてどう思つ？」

「別にいいんじゃない？　そんな人、そうそういないと思つけど」

「世界の十パーセントはそういう人らしいがな。」

「それだけか？」

「うん。他に何か？」

「いや、いいや。質問終わり」

時計を見ると、もうお昼だつた。じきに集合時刻になるだらう。

「じゃあ戻るか」

「そうだね。」

「結局、何を調べたかったの？」

「暮菱葛葉、今日のラッキーパーソンは、車酔いに弱い大親友！」

「……」

「こんなことを聞きたかったわけじゃない。」

「……だーいしーんゆーう」

「それだけ？」

「ああ、他に何か？」

「こいつ、開き直りやがつた。」

さつき自分で同じことを言つたもんだから、開き直られると困る。
しかしまあ、腑に落ちない。

次の日。スキー合宿一日目。

「葛葉、起きる。……起きるー。…………」の俺が起きるつってんのがわからんねーのかつ！」

「涼風、起きてる」

お願いだから、そんな頓挫した連載小説みたいな起^レし方しないで欲しい。

「何呑^{ハグ}気にやつてんだよ。急げ」

遅刻かな。まだ起床時刻までは時間があるはずだけ。

「いや。

仙堂の奴が病院に運ばれたらしー」

話を聞くと、零君は早朝に出歩いていて、雪に落ちたそつだ。命に別状はないが、意識がないらしい。このままだとスキー合宿は中止だろ^ハ。

なぜ早朝に外に出ていたのかはわかつていなが、一人で落ちこちた事故だと思われる。

「腑に落ちませんね」

そういつたのは僕の委員長、もとい、僕のクラスの委員長だった。

「暮菱さんもそう思いませんか？」

「確かに納得はいかないけど」

それを聞いて田の色を変える委員長。まずい。いつも起きは大抵困ったことになる。

「じゃあ、調べてみませんか？」

「やつぱり。」

僕は昨日零君と話したことを委員長に伝え、その中に引っかかるワードを見つけた。

「『愛する人に殺されてもいい』ですか」

「うん。そんな質問をされた」

「どうも引っかかりますね」

「こいつにはその時の心情が影響するから。その言葉を額面通りに受け取るなら」

「仙堂さんは『愛する人』に突き落とされた」

「そうなるね」

さすが委員長。話が早い。

「だから、零君の彼女が犯人の可能性が高い、というわけだ」

「彼女さんですか。

相手が女の子なら、私が調べてみます」

しかし、二十分後。結果は芳しくなかつた。

「見つからなかつた」

「はい。クラスの女の子全員だけでなく、学年全体にまで規模は広げたのですが

「他の学年はスキー合宿には来れないし。まさか先生とこうわけもないだろうしね」

「一応先生方にもお聞きしたのですが、彼女さんがいらっしゃる様子も無かつたと」

「一応聞くけど、委員長自身が犯人じゃないよね?」

「いえ、お恥ずかしい話ですが、他に好きな方が……」

「いくら委員長がパーフェクトでも、零君とは合わなさそうだ。」

「むう」

「手詰まりですね」

「だね」

委員長は未だに不満そつたけど、僕たちのせせやかなる捜査

も打ち切りにするほか無かつた。

結局結論は出せず、帰りのバスの中。涼風は、やつぱり揺れに苦しんでいる。

「葛葉」

涼風が真っ青な顔でこちらを向いた。

「何？ 酔い止めは持つてないけど」

「無いのかよ。つたぐ、そのくらいあつてもいいだろ。

じゃなくて仙堂のことだよ」

「零君がどうしたの？」

「お前は犯人が解つてたんじゃないのか？」

「どうしてそういう思うの？」

「いつものお前なら、容疑者の候補が出なかつた時点で捜査打ち切りつておかしいだろ。こじつけで犯人を決めるくらい諦めが悪いお前がそこで止めるつてことは、なんか解つたつてことだろ」

「バレた？」

さすが涼風。僕の親友なだけある。

「で、犯人は一体誰だ？」

「実は誰かまでは特定できていんだけどね。

零君は『愛する人』とは言つたけど、それを『彼女』とは言つてないんだよ」

「と、言つことは、あれか？ 犯人は女じやなくて男つて……」

「うん。

仙堂零は同性愛者だ

「そんなのアリか？」

「いまだき珍しくもないでしょ。世界の十パーセントはそういう人らしげいよ」

「委員長が犯人とかじやないのか？」

「自分で犯人じゃないって言つてた」

「委員長には甘いんだな。そういうのダブルスタンダードっていうんだぜ？」

例えばさ、委員長が仙堂と付き合つてたとして、仙堂の人間関係を委員長自身が聞いたら、みんな委員長との関係は除外して答えるんじゃないかな？」

「『めん涼風。わかりやすく説明して』

「委員長が葛葉に事実を話したとして、仙堂が誰とも付き合つてなかつた、の『誰とも』に質問者である委員長が含まれてない可能性があるってことだよ」

「ああ。その可能性は考えてなかつた」

「おい」

「でも、それはないとと思つ」

「なんでだよ」

「合宿中は煙草吸つてなかつたからね、田はいつも以上にいいんだよ。

委員長、嘘をついてるよつて見えたから、田はいつも以上にいいんだには見えないしね」

それに、クラスメイトが容疑者にされているのに放つておくよつな委員長は僕らの委員長じゃない。

「まあ、そうだな」

「とにかくして、犯人は、クラスの男子のうちの誰かだ、QED」

結局、零君は意識が戻つても事件のことに関して何も言わなかつたが、学校を辞めることとなつた。元から留学の予定があつたらしい。それが早まつただけだと本人は笑つてゐるが、そんな言葉を聞いてくれるような仲の良い友達は、彼にはいないのでつた。

同時期にもう一人、男子生徒が退学することとなつた。じぢぢは

親の仕事の都合だそ'うだ。

どうりでいつも真偽のほどは定かではないが、何も言つま。

そして

「暮菱さん、副委員長よりしづくお願ひしますね」

人気投票の如き圧倒的な票差で、僕は副委員長にこれてしまつた。だがしかし、隣で天使のよつに微笑んでいる委員長と一緒に仕事ができると思うと、副委員長職も悪くない気がする。

どうやら僕は、仙堂零のようなアウトローにはなれないようだ。

ver Kill》 is not Bad END.
《Love is O

(後書き)

『猛吹雪の蠱毒』、いかがでしたか。
感想頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3941t/>

猛吹雪の蠱毒

2011年5月29日18時40分発行